

〔寸法雜々〕とうだい

高さ壹尺九寸六分、くもでのまたかど、板のきの座の間は八寸、中くもでの座三寸なり、

〔宗五大草紙〕殿中さまの事

一女中方にとぼされ候御燈臺、是も繪にあるごとく、燈臺あぶらつき、すゑ物、うちをば白くぬり、外はこくしつにぬりてまさる候、ふくりんはめつきさし候、立候柱もつかうのごとくゑり入て、黒ぬりまさるあり、かはらけのすはる所、あかねにてまろくわをして、めつきをさす、三がなわにあしのやう成をもつかうなり、成臺にたて、其上にかはらけをすへ候、柱の下の臺ももつかうにて、まんぢうなりに候、

〔眞丈雜記調度〕燈臺は木にて作り、うるしにてぬる、白木にもする也、形は燭臺の如く也、但油蓋

を置く所と下の臺は、もつかう形にして、さうもり高にする也、條々聞書にみえたり、燈臺には油

火をとぼす也、燈臺は本式也、燭臺は略儀也、○下

燈臺種類

〔源平盛衰記 二十〕八牧夜討事

景廉云、○中縁の上へツト上リ侍ヲ見入タレバ、高燈臺ニ火白ク搔立タリ、

〔眞俗交談記〕建久二年九月十日自  
十至甲同日夜今記之

資實云、孔雀經御修法記録云、伴僧經机前各三木丁一脚、置燈器高二尺許云々、蓮臺寺僧正記也、餘

師多分用小燈臺、又云、人記録皆小燈臺也、或陳座三木丁、又後七日、香冰机三木丁、眞言院  
建立之此外无用

之如何、覺成僧正云、古様用三木丁事勿論也、雖然近來皆用小燈臺、尤宜云々、

〔類聚名物考 調度十八〕切燈臺、きりとうだい

思ふに燈臺は高く、切燈臺はひき、なり、執筆の前に置は、もの書事の便りによければなり、

〔枕草子〕きよげなるおのこのすぐやくを、日ひとひらちて、猶あかね、やみ、かき、とうだいに